



**借りていきます「外のチカラ」**

対馬市は、長崎県立大学(太田博道学長:写真左)と、学生や地域の人材育成・学術研究機能の向上・地域社会の発展に寄与することを目的に協定書を締結しました。



優良団体賞を受賞された厳原少年剣道部

**長崎県のスポーツ振興に貢献**

2月12日、長崎市で「平成25年度 長崎県スポーツ表彰式」が行われ、厳原少年剣道部(天野詩子代表)が長崎県社会体育優良団体賞を、対馬市スポーツ推進委員の平山清治さん(厳原町)が長崎県スポーツ功労顕彰を受賞されました。



主藤代表に寄付を手渡す須澤隊員

写真提供:長崎新聞社

**伝統継承の一助に**

島おこし協働隊の須澤・山下・村田の各隊員は、公民館講座「赤米あかこめ稲藁しめ縄づくり」の参加費の一部と、対馬次世代協議会の販売する赤米酒粕アイスの売り上げの一部を、赤米頭受行事保存会(主藤公敏代表)に寄付しました。



**第13回 対馬少年の主張大会**

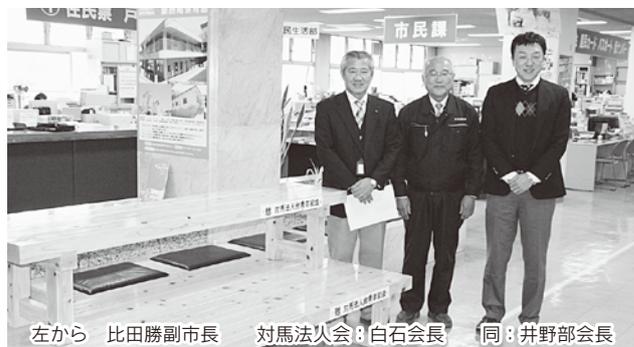
主催:対馬市青少年健全育成連絡協議会・対馬市教育委員会



協定書締結式に参加された各郵便局長の皆さま

**便利になるバイ!**

対馬市と日本郵便(株)との協議が整い、4月1日から「琴・小船越・水崎・鹿見・佐護」の各郵便局で、住民票等の証明書が交付できるようになります。



左から 比田勝副市長 対馬法人会:白石会長 同:井野部会長

**対馬ひのきで「休んでいきませんか?」**

2月12日、対馬法人会青年部会(井野貴之部会長)から、対馬ひのきで作られた長椅子3台が対馬市に寄贈されました。比田勝港ターミナルに設置され、観光客の憩いのスペースとして活用される予定です。

**思いよ!届け**

2月16日、対馬市公会堂で「第13回対馬少年の主張大会」が開催されました。市内各地区の予選を勝ち抜いた10名の中学生が、日頃の生活で感じた事などを発表しました。

各賞の結果は以下の通りです。

- 最優秀賞 横松 こころ 和さん(厳原中2年)  
「命について考えた時間」
- 優秀賞 小茂田 さあや 紗羽さん(浅海中2年)  
「便利な道具の使い方」
- 優秀賞 宇津井 しほ 志帆さん(比田勝中2年)  
「光をくれる言葉たち」

社会を明るくする運動長崎県弁論大会対馬市代表  
佐々木 あさな 麻奈さん(久田中2年)  
「しあわせ」

## 第13回対馬少年の主張大会最優秀作品

### 「命について考えた時間」

厳原中学校2年

横松

和



「ウズラの卵を孵化させること」  
これが、私の夏休みの自由研究のテーマでした。「本当に生まれるの？」半信半疑で始めた卵の保温でも、日を重ねることに楽しみになり、孵化予定日はまだ先なのに、ウズラの餌の心配までするようになりました。

ウズラは4〜6時間に1回、「転卵」という卵の回転をしなければなりません。ある日、転卵をしようとするときつい腐卵臭がしました。4つの卵のうち1つが腐っていたのです。  
卵は残り3つ。孵化予定日も迫ってきました。

ついに迎えた孵化予定日。夜になっても何も起こらず、それぞれわしたり、焦ったり、「もうだめかも」と落ち込んだりしながら、翌日を迎え、あきらめかけていたそ

の日の夕方、卵の1つにひびが入っていることに気がつきました。飛び上がるほどうれしく、その時から、卵と私のにらめっこです。卵を気にしながらの生活。翌日の夕方には、ひびが大きくなっていくようでした。じつと見守っていると、卵がブルブルと震えます。

「生きている！」今まで味わったことのない感激でした。次の朝を迎え、部活から帰宅した昼過ぎ、なんとウズラが生まれていました。とても、とても小さくてチョコレート色。小さい声で懸命に鳴いていました。その日の夕方、別の卵にひびが入り、私たち家族は「兄弟ができるね」と喜びました。そして、次の日、私は孵化の場面に立ち会うことが出来ました。必死に殻を割り、出てくると、まだぬれてる羽を一生懸命にはば

たかせて鳴きました。小さい黄色いウズラでした。  
残りの1個はついに孵化しませんでした。孵化した2羽が、生きられなかった命の分まで頑張ってくれると信じ、卵を庭に埋めました。

誕生して3日目、初めて水を飲みました。このころには、ウズラたちは元気に走りまわり心配なこととは何もないかのように見えました。しかし、4日目の朝。

「ウズラが死んだぞ！」：父の声が目覚めました。跳ね起きて、急いで見に行くと、チョコレート色のウズラが死んでいました。眠っているように見えました。そつと掌に乗せると、硬く、冷たくなっていました。悲しくて、声をあげて泣きました。

1羽だけになったウズラの飼育箱、とても静かになったように感じました。気になって黄色いウズラをずっと見守っていると、なんだか様子がおかしいことに気がつきました。明らかに、元気がありません。嫌な予感が頭を離れず、私は泣きながら急いでカイロに充てたり、水を与えたりしました。しかし、どうすることもできませんでした。

「最後まで温かくしてやろう」と母の言葉にはっとして、体にカイロをかけ、生まれた場所に戻してやりました。涙がとまりませんでした。私は、泣くことしかできませんでした。

2羽と過ごしたのはたった数日。しかし、この小さな命から多くのことを学びました。

孵化のときに見せてくれた懸命に生きようとする姿の尊さ。それでも、命は弱く、はかなく、なすすべもなく見送るしかなかった悔しさ。ウズラの体のぬくもり、「ピーピー」と必死に鳴く小さな声、小さな羽を羽ばたかせるしぐさ、すべてが命でした。そして、「死。」冷たく、硬く、どうすることもできない大きな力。

今、私は、「この世に不必要な命などない」ということを改めて感じています。「命が一番大切」という言葉の意味も初めて理解できた気がします。

すべてウズラが教えてくれました。一生、忘れません。ともに過ごした幸せな時間と共に、胸に刻んで、私は、生きていきます。

※横松さんは、対馬市代表として「平成26年度長崎県少年の主張大会」に出場します。